

昭和17年2月旧日本軍によるシンガポール陥落で、一躍勇名を馳せた「マレーの虎」山下奉文大将ならぬ、「マレーの犬」の哀れな最期をこれまで何度も目にしてきた。タイの首都バンコックから赤道直下のシンガポールまでマレー半島3か国を、ある時は列車で、また時にはバスや車で延々2,000 kmを縦断した。

40年以上も昔、バスで1週間かけてバンコックからシンガポールへ続く国道を南下した時のことである。車内では、運転席近くに陣取り映画のスクリーンを見るように、フロントガラスを透して椰子の木々が茂る南洋特有の風情や、牧歌的な集落のたたずまいの中に開けっ広げな庶民の生活ぶりを目にして胸をときめかせていた。

多くの車が行き交う道路沿いには、放し飼いされた家畜や野良犬がぶらついたたり、道路を横切る姿がよく見られた。バンコックを出てしばらくして、道路上に1匹の野良犬の死骸が無残に転がっていた。誰もその死骸を片付けようとならないのか、後から来る車に何度も轢かれて周囲には肉片が飛び散る惨たらしさだった。しばらくしてま

た道路上に別の野良犬の惨めな死骸が目に入った。マレーシアに入っても同じように所々で野良犬の死骸を見た。これではシンガポールに到着するまでに一体何匹犬の死骸を見ることになるだろうか。

そして、旅も終わりに近づいたころ、こともあろうにわがバスがとんでもないことをやってしまった。ドン！ バスが道路を横切ろうとした野良犬に勢よく体当たりしてしまったのだ。乗客の間から一瞬「危ない！ キャー！」と悲鳴が上がったが、ドライバーはまったく気にする素振りを見せなかった。バスを停めて確認のために一旦降りたが、間もなく戻ってきて言った。「犬は死んでいる。すぐ出発しよう」。

こうしてシンガポールまでの間に、わがバスが轢き殺してしまったワンちゃんを含め、何と15匹の犬の轢死体を見ることになった。

ペット・ブームの今の日本ではとても考えられないが、「働くもの食うべからず」の国では野良犬のような食いつぶしは、儚く哀れな運命をたどることになる。つくづく南方の野良犬に生まれなくて良かったと思う。

エッセイスト 近藤 節夫